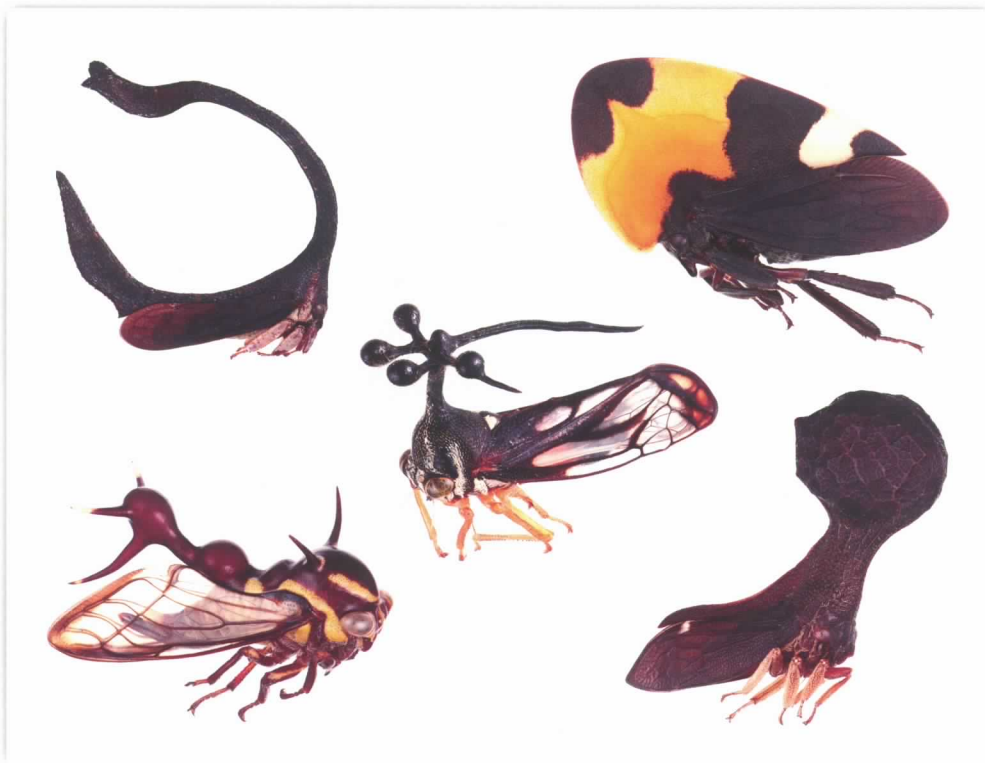


Bulletin of the Kyushu University Museum



さまざまな姿形のツノゼミの仲間

March 2011

The Kyushu University Museum

Bulletin of the Kyushu University Museum

March 2011

Number 9

C o n t e n t s

- Kyoko FUNAHASHI** ————— 1
A brief examination of exhibiting manners of skeletal remains
- Shozo IWANAGA** ————— 9
Re-examination of the civil year of the beginning of Yayoi period (II)
- Katsunori MIYAZAKI** ————— 19
The Original, Rough sketch and Make-up of Siebold 'NIPPON'
- Yasushi KOGA** ————— 47
Distribution of Whale meat in mid-19th Century Northern Kyushu Region
- Misako Mishima, Mai Sakakura, Akari Tanaka,
Akihiko Matsukuma and Shozo Iwanaga** ————— 69
Challenge Using Authentic Specimens of the Kyushu University Museum
- Let's Look, Draw, and Compare ! - : Practice Report
- Mai Sakakura, Akari Tanaka, Rika Fujino,
Misako Mishima and Masatetsu Okazaki** ————— 77
Earth Cafe: "Great! Grand Canyon" : A Practice Report

The Kyushu University Museum

Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>



古人骨展示に関する小論

舟橋京子

A brief examination of exhibiting manners of skeletal remains

Kyoko FUNAHASHI

九州大学総合研究博物館：〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

1. はじめに



九州大学総合研究博物館には縄文時代から近代にかけての約3600体の古人骨が収蔵されている。これらの人骨は1950年代から1980年代にかけて金関丈夫氏・永井昌文氏の指導の下医学部解剖学教室により収集された国内有数の収蔵数を誇る人骨コレクションである。人骨は全て博物館の第一分館において収蔵および展示されている。本稿では古人骨を使用した展示方法についてこれら九州大学総合研究博物館関連の展示を例として挙げ博物館展示の基本理念との対比から古人骨展示の検討を行う。

2. 博物館展示の理念に関する研究小史



博物館の展示に関しては、我が国においても前田不二三氏以降、単に「ものを見せる」のではなく「もので見せる」「ものをして語らしめる」展示(前田1904・青木2000aなど)の重要性をはじめとし、様々な議論が行われている。「ものをして語らしめる」内容とは展示側の意図するものであり大学博物館では大学における研究成果がそれに当たろう。また、博物館展示の理念を形成する二大要素の議論が行われている。古くは木場一夫氏により、展示資料の違い(審美的資料/教授的資料)による2通りの展示方法が示され、博物館展示にはその両方が必要であるとの指摘がなされている(木場1949)。同時期に棚橋源太郎氏は博物館展示の基本理念を①「物品を観衆の眼に愉快に映ぜしめること」②「知識伝達の方便として物品を利用すること」としている(棚橋1950)。その後も展示の目的により、木場氏の審美的資料を用いた展示を「鑑賞展示」、教授的資料展示を「教育展示」とする分類がなされる(鶴田1956など)。その中で、新井重三氏は博物館における展示を、①ある意図のもとにその価値を提示②展示企画者の考えや主張を表現・説示する行為として定義している(新井1981)。加えて、青木はこの新井氏の2分割を支持し前者を「提示型展示」後者を「説示型展示」とし、その両方の重要性を主張するとともに、前者は必ずしも審美的展示である必要は無く意図的配列による収蔵展示形態こそがそれに該当すると指摘している(青木2000b)。氏は1点で人寄せ効果のある希有な資料が無い場合でも、収蔵状態を展示と

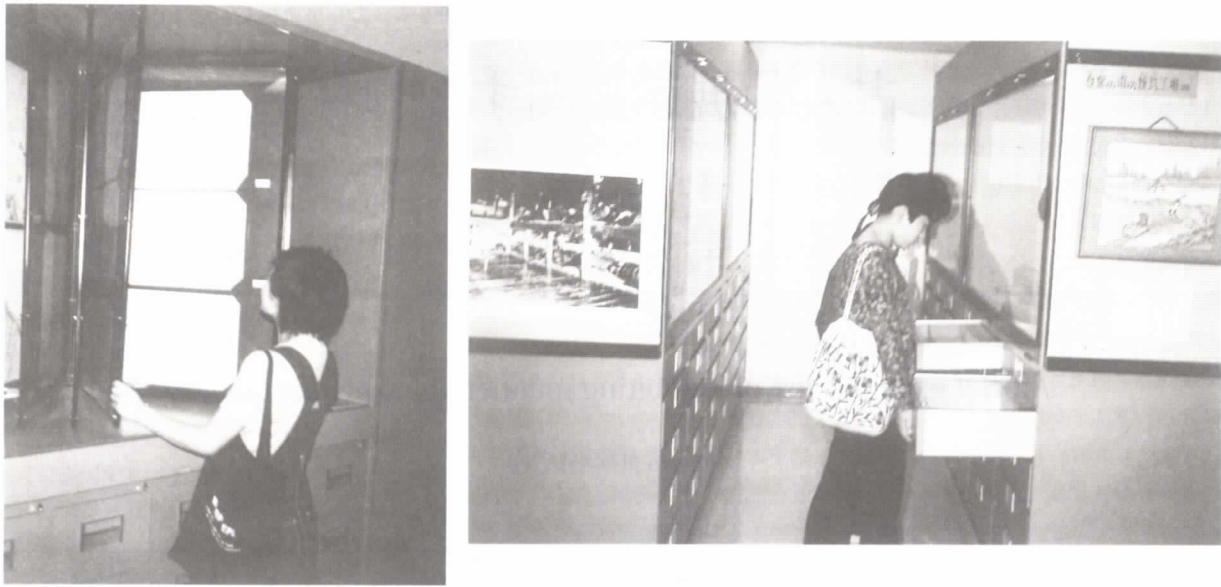


図1 収蔵展示例(北海道開拓記念館青木2000より引用)



図2 九州大学総合研究博物館古人骨収蔵状況

して使用し積極的「人寄せ効果」が期待されるとしている。さらに、説示型展示への導入として、展示に対する注意を喚起するために様々な展示技法を駆使しなければならないとも指摘している。以上の研究に見られるように展示資料或いは展示目的のどちらかで分類するかにより使用される言葉は異なるが、博物館展示における基本理念には、人目を引く或いは目で楽しむための提示型展示(≒鑑賞展示)と提示側の考え・主張を見学者に読み取ってもらうための説示型展示(≒教育展示)、の2側面があると言えよう。

では、九州大学総合研究博物館において収蔵されている古人骨をこれらの基本理念に照らし合わせてみた場合どのような展示が行われているであろうか?九州大学総合研究博物館(以下本文中では九大博物館)に収蔵されている古人骨の最近の学外における展示を含め検討を行う。

3. 事例検討:九州大学総合研究博物館所蔵人骨について

a) 第一分館における古人骨資料展示

i) 提示型展示

九大博物館所蔵の古人骨資料とその展示について前出の展示理念と対照してみよう。前者に関しては人骨それ自体が人の興味関心を引くものであり美術品同様にそれ自身が人目を引くという提示型展示にうってつけの資料である。事実、展示の一般公開日には普段静かな人骨標本室も非常に賑わう。一方で、青木氏が提示型展示の重要形態として挙げている収蔵展示の要件とするところの「すべての収蔵資料を展示する」という点についてはどうだろうか?結論から述べると氏が例としてあげているような見学者が収蔵ケースを開いて収蔵状況を見せるという方法(図1)は古人骨とい



図3 九州大学総合研究博物館古人骨関連展示室



図4 九州大学総合研究博物館古人骨展示

う資料の性質上実施困難である。古人骨資料に関しては個人の尊厳の問題・資料の保存状況の問題から、古人骨そのものが見学者の目に触れない形で収蔵状況を展示するのが最善の方法であると考えられる。九大博物館においても、直接的に古人骨が見学者の目に触れる状況ではないが、古人骨の収蔵状況を見学することは可能である(図2)。九大博物館の優れた人骨コレクションとガラス越しに見えるその収蔵状況は青木が主張する見学者の博物館のイメージ「古いもの珍しいものが多いところ(青木2000a)」に合致しており見学者に満足感を与えうる収蔵展示たり得るものであろう。因みに青木氏が主張する収蔵展示と九州大学総合研究博物館の中間形態ともいえる、見学者が古人骨そのものを直接目に見ることができる収蔵展示は、近年開館した宮崎県西都原考古博物館において実践されている。以上みてきたように、展示の提示性に関しては人骨そのものへの人々の興味とその所蔵個体数・収蔵状況により充分満たされているとあって良い。

ii) 説示型展示

第一分館においては、古人骨の常設展示が行われている。人骨コレクションの収集・収蔵に貢献した金関氏・永井氏および古賀英也氏の業績紹介パネル展示、収蔵人骨とともに出土した弥生時代の貝製腕輪に端を発した永井氏の貝輪研究や博物館兼任教官である田中良之氏による収蔵人骨を使用した親族関係と古代国家成立に関する研究、同じく博物館兼任教官である中橋孝博氏による収蔵人骨を使用した日本人の形成に関する研究のパネル展示等が行われて

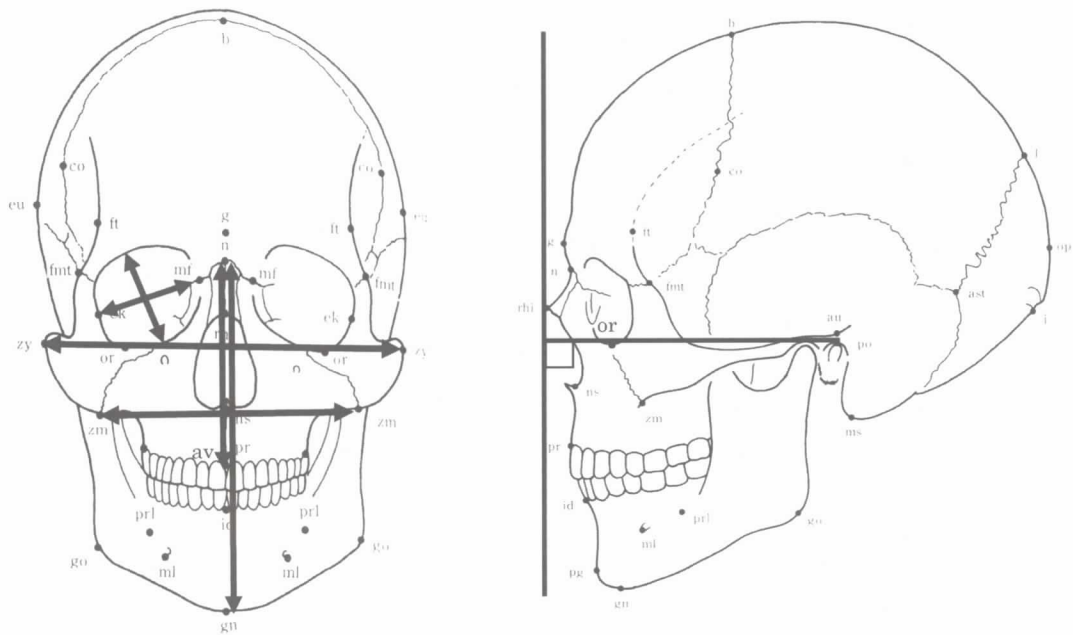


図5 頭蓋骨計測ポイント(左)と耳眼水平面(右)



図6 耳眼水平面揃え展示例

いる(図3)。加えて、実際に収蔵人骨の一部を使用いくつかのテーマ別に展示が行われている。展示は大きく、縄文時代人と弥生時代人の時代差・弥生時代人の地域性・古墳時代人の地域性および中世・近世人の形質的特徴・病変に関する展示が行われている。これらはそれぞれ弥生時代人に見られる渡来系形質の流入(金関1955)・渡来系形質の拡散の地域差の研究(中橋・永井1989など)、古墳時代人に見られる渡来系形質の地域的様相の成立に関する研究(Doi and Tanaka1987)、中世人の形質的特徴(中橋・永井1985)、近世人の形質的特徴の成立に関する研究(岡崎他2004)、抜歯風習(舟橋2000・2010など)、古病理(福島他1985、石川ほか2004など)など、収蔵人骨を使用した研究成果を実際の古人骨を用いて視覚的に理解しやすいように配列した展示である(図4)。

これらの展示のうち古人骨の形質的特徴の地域差・時期差を示す重要な人骨の属性として顔高と眼窩高があげられる(図5)。顔高すなわち顔の高さとは上顔高(図5左のn-av間の距離)もしくは顔高(図5左のn-gn間の距離)であり、それぞれの値もしくはこの値を頬骨弓幅(左右zy間の距離)や中顔幅(左右zm間の距離)で割った上顔示数や顔示数を用いて顔の高さの集団間比較を行う。眼窩高すなわち眼窩(眼球の収まる空間)の高さとは、眼窩幅(図5左のek-mf間の距離)の垂直2等分線と眼窩の上縁・下縁との交点間の距離を測った値であり、この値そのものもしくはこの眼窩高を眼窩幅で割った眼窩示数を用いて眼窩の高さの集団間比較を行う。これらの形質的特徴を効果的に見せる際に重要になってくるのが耳眼水平面(図5右)と見学者の視線の関係である。耳眼水平面とは眼窩下縁(図5右or)と外耳孔上縁(図5右po)を結んだ線であり、人間が直立姿勢で顔面を正面に向けた際に体の上下軸と直行する。古人骨の頭蓋骨を観察する際には、この耳眼水平面と平行に視線を保つことにより顔面部を正面から見るができる。したがって、古人骨展示において形質的特徴の差を示すには、見学者の視線と耳眼水平面が